

一穂ミチ／咲くやこの花インタビューvol.39

一穂ミチ(いちほ・みち)【令和4年度 文芸その他部門[小説]】

令和4年度「咲くやこの花賞」《文芸その他》部門は、小説家の一穂ミチさんが受賞しました。「繊細な言葉選びで人間関係を巧みに描く確かな筆力と物語の構成力を持ち、近年、文学賞の候補に立て続けに選ばれるなど、将来性の高い注目の書き手であり、今後さらなる飛躍が期待される」との評価を得た一穂さんに、小説家デビューまでの道のりや、第168回直木賞候補にもなった最新刊『光のどこにいてね』の創作秘話などをお聞きました。

取材・文／岩本和子

プロとアマの違いは「納期と文量」

まずは受賞のご感想をお聞かせください。

贈呈式では、大阪市中心公会堂という立派な会場の舞台に立たせていただいて。私も大阪で育ったもので、中央公会堂は子供の頃から馴染みがある建物でしたので、自分があのような形で立たせていただける日が来るなんて思いもよらなかったですし、すごく嬉しかったです。

小学生の頃は漫画家を目指していたそうですね。いつから小説を書こうと思われたのでしょうか。

小説という形で書き始めたのは、大学生の頃からですね。当時、好きな漫画のファンサイトみたいなものを作るのが流行っていたんですよ。なので、そこにアップして、掲示板で同じファンの人たちと交流したり、同人誌を作っていました。

同人誌は、小説家としてデビューする道筋としては、近いものなののでしょうか。編集者さんに見つけられやすいというか。

漫画の方は多いですね。漫画は上手い人ってパッと見てわかるので。小説は、ある程度、元になる作品をわかってないと、というところがありますので、私の場合は、本当にたまたま、同じ原作を

好きな方が編集者をやっていらして、お声がけいただきました。最初にメールをいただいた時は、「本当に？」みたいな(笑)。半信半疑でしたね。

その時はデビューしようというお考えはなかったですか？



なかったですね。私がやっていたのは、あくまでも二次創作で、原作の魅力ありきのものなので。その時、自分でオリジナルのBL(ボーイズラブ)を書こうという意識も全然ありませんでした。

初めての創作のことを覚えていらっしゃいますか。

自分で名前をつけなきゃいけないんだと思って。それが恥ずかしいような感じがありましたね。二次創作は、原作のエピソードをいかに遊ばせてもらうかみたいなことだったので、全部自分でっていうのは…。名前とか、身長とか、誕生日を自分で決めるんだ…みたいな(笑)。それを小説の中で使う、使わないは別にして。考えるだけならいいんですけど、編集者に見せるっていうのが初めての経験なので、子どもが大学ノートに書いた漫画を大人に見せるみたいな恥ずかしさがありました。「こんなんですけど…」みたいな。何を言われるか全くわからないので、めちゃめちゃ緊張しました。

デビューされてプロとアマの違いを感じたことは何でしょうか？

やはり納期と文量ですかね。同人誌なら何ページでもいいんですよ。お仕事は枚数が決まってく

るので、多すぎても、短すぎてもいけなかったり。あと、同人誌は自分の好きなように書けるんですよね。同じキャラクターが好きという時点で、好みが通じるところがあって、そのキャラクターの魅力をプレゼンするみたいな気持ちですけれども、商業誌はもっと間口が広がるので…。

小説『光のところにいてね』が出来上がるまで

2022年11月に発売された『光のところにいてね』(文藝春秋)は、2人の女の子が交互に独白しながら進むという構成も良かったですし、主人公に合わせて筆致も成長していて、すごく面白かったです。この作品はどのようにして生まれたのでしょうか？

編集者からはわりとふんわりしたオーダーだったんですね。「夜、寝る前にちょっとずつ読んで、最後にパタンって本を閉じたら、その人にとって大事な物語になっているようなお話を」と言われて。その時は、要求のハードルが高いなというふうに思ったんですね。実際に連載で掲載されたのが、それから1年ぐらい経ってからで、その間は「思いつきません」と繰り返し、繰り返し言っていて。

お話があったのはいつ頃だったのでしょうか？



初めて編集者さんとお話をしたのが2020年の2月ぐらいでした。でも、全然、思いつかないまま時が流れて。その年の秋ですかね、友達と温泉施設に行って、広い露天風呂につかって、めちゃめちゃ気持ちよくて。その時、たとえば女の子の人が同性の恋人と来たら楽しかろうと思ったんです。混浴でもない限り、男女では一緒に入れないじゃないですか。でも「同性の恋人だったら一緒に広いお風呂につかれるんだな。それいいな」って思っ。もちろん男性同士でもよかったのですが、ドライヤーがいっぱい置いてあるとか、「化粧水もあるよ！」みたいな、女の子がキャッキャしていた

らかわいいなと思って。その時に女の子の話かな…と漠然と思って。それから、あんまり最後を決めないまま、とりあえずやってみましょうかみたいな感じで始まりましたが、初期のプロットは違っていました。ちょっと格差のある2人の女の子という感じで描きたかったのは一緒なんですけど、最初はもっと恋愛に寄ったドラマになっていました。

本当、全然違いますね。

それで、2020年の年末くらいに、第一章の初稿を上げたら、全直しとなりました。流れは一緒なんですけれども、初稿の段階では、幼少期の文章が大人っぽかったんですね。大きくなった主人公が幼少期を振り返って書いているみたいな感じで、淡々としている描写だったので、「子どもの目線にぐぐっとフォーカスした方がいいです」と言われて。そうすると、結構難しいんですよね。子どもってそんなに語彙があるわけではないので、同じような表現が頻出してしまうし、かみ砕いて子どもの心理を描くというのはなかなか、その時の私には難しかったので、悪戦苦闘した記憶があります。

そうだったんですね。2人の女の子が交互に語っていくというアイデアは？

小説の視点って、漫画みたいに自由自在には動かせないじゃないですか。漫画だと、ページが変わって別の人の語りになっていても自然に読めますが、小説では自由に行き来させるのは難しいので、一人称の視点で2人交互に描くことで、両方の姿が見えるようにというのは、自然とそうになりました。

主人公のひとり、結珠(ゆず)が意外な行動を見せるラストシーンも面白かったです。あの場面は、どのようにして出来上がったのでしょうか？

ラストシーンは、書くまで考えていなかったぐらいで…。最終章は3、4回、連載したのかな。単行本にするスケジュールを考えて、「次で終わらせなきゃいけない」みたいな話をしていた。「考えてますか？」って編集の方に言われて、黙り込むっていう(笑)。ただ、ここまで転がってくれたら、あとはもう書いていきさえすればなんとかなるだろうと思って、流れに任せました。なので、(ラストシーンは)自分の感覚でも「予想以上にこの子は頑張ったな」と思いました。

小説を書く時、編集者の方とどんなお話をされるのでしょうか？



私の場合は、オファーをくださる編集の方に初めてお会いしたら、「私にどんなものを求めていますか」と聞くようにしてます。私に何を書かせたら面白くなると思っていらっしゃるのかお聞きします。私の場合、「これが書きたいです」というものがある方ではないので、編集さんからインスピレーションをいただいたり。雑誌に載る場合は「何月号で、こういうテーマで書いてみませんか？」というご依頼もあります。

依頼を受けたものの、意外と苦戦したとか、そういうことはありましたか？

苦戦はね、毎回するんですよ。予定と違う、こんなはずじゃなかったんだけどな…と思いながら、やるんですけど(笑)。内容について編集さんから指摘があったら「そうか～」みたいな。そういう時は、信頼関係の中で、私と同じか、それ以上に編集さんもこの物語のことを考えてくれているって思えば、自分の中で受け入れるところは受け入れてみたい。そうでなかったら、また話し合っ「私はこう思ったんですよ」と、そういうコミュニケーションを取りながら作るという感じですね。

コミュニケーションが大きい。

そうですね、どうやったらもっといいものになるのかとお互いが考えてやっていくのは、一人だとできないので、非常にありがたいと思います。

時には自分の意見を強く言わないといけないこともあるのでは？

私も及び腰になることはあって。原稿はゲラという形になって、手元にやってくるのですが、編集者さんの指摘がいろいろ書いてあるんですよ。それに対して瞬間的に反発することもありますけど、

あとから冷静になって私が良くなかったな…と思って、「あの部分なんですけど…」って言ったり。その逆にもあります。「この間、ああ言いましたけど、やっぱり穂さんの書き方でいいと思います」とか。それもなかなか、昨日、今日会った人とでやり取りするのは難しいので、ある程度、時間は要りますね。編集者も私という人間への好き嫌いで言っているのではなくて、物語だけを見た上で言ってくださっているということは、忘れないようにしなければと思います。

私も書いたものに訂正が入ると、自分自身を否定されたような気がして、若いころはことさら傷ついていました。



わかります、わかります。私もいまだにありますよ。自分がバカだと言われたような気になるんです(笑)。ただでさえ文章は自分が出るものなので、それに対して色々指摘があると、自分自身を否定されたような気持ちになるのは、ある意味、当然だと思うんです。けど、まとまった量のゲラに編集の方からの指摘がいくつもあると、時にはつい頭に血が上ってしまっ…(笑)。でも、ちょっと時間を置くと冷静になって……便利ですね、消せるボールペン。それまで書いたことを全部消して、マイルドな文面に書き換えて、なるべく淡々と自分の意見を述べています。

「文字にすることが難しいものに挑んでいきたい」

では、今後の展望を教えてください。

言葉とか、文字にすることが難しいようなものに挑んでいきたいですね。例えば音楽であつたり、ダンスとか、バレエとか、体のことであつたり。私は漫画が好きなんですけども、漫画を読んでいて、ページをめくった次の瞬間に決めゴマがあつたりすると、強烈に羨ましいと思うんですよ。小説でそれを一発で見せるのはなかなか難しい。特にアクションシーンとか、そうですね。そういう

ものを表現できるようになるには、どうしたらいいのかなと考えて、成長していけたらいいなと思います。目に飛び込んでくるもののインパクトに、どうやって文章で太刀打ちできるのだろうということを考えます。

次に、ちょっと質問を変えまして、今、一番楽しいと思う趣味は何ですか？

やっぱり動画を見ながら、お酒を飲んでる時ですね(笑)。お笑い芸人さんのチャンネルであったり、料理してる動画とか。

注目しているお笑い芸人さんはいらっしゃいますか？

今、好きなのは真空ジェシカさんと、ロングコートダディさんです。空気階段さんもずっと好きです。

最後に、一穂さんが「咲くやこの花賞」を贈りたいと思う大阪の好きなところは何でしょうか。

梅田の歩道橋ですかね。阪神百貨店のところ。今、だいぶ拡張されて広くなりましたけれども、あれがもっとこじんまりした時代から、梅田に行くたびによく歩いていて。あの歩道橋は、街の姿をずっと見守ってくれたんだなと思います。百貨店も変わってしまって、あそこから見える景色もだいぶ変わってしまったんですけど、あの歩道橋で立ち止まって、梅田を見るのが私は好きです。